

## 「現われ」と「表われ」の普遍的相関

——「表現」の一般理論のために——

### Die universale Korrelation von "Erscheinung" und "Darstellung."

——Zur allgemeinen Theorie des "Ausdrucks"——

矢 島 忠 夫\*

Tadao Yajima

(1985. 12. 19 受理)

#### 論文要旨

マルクスとフッサールというきわめて異質な思索者のうちに、響きあう「表現の論理」を見い出そうとする試みである。その基軸は、「現われと表わしの普遍的相関」にある。「表現」はこの相関に基づきながら、「現われの還元」においてその特異な機能を発揮する。

#### 序

“Darstellung”と“Erscheinung”はマルクスに関しては例えば「表示」、「現象」などと訳され、フッサールに関しては「呈示」、「現出」などという訳語を与えられている。当然の事ながら、この相違は、これらの表現がその中で生きている思想的連関に帰因するのであって、表現の感性的側面の同一性から意味の同一性へと安易に推論を及ぼす事は避けなければならない。しかしながら、訳語の差異に闇雲に執着する事が決して生産的思考の源泉たりえない事も確かである。それゆえここでは、感性的な音の響きあいを通して、意味されている事柄が響きあう事をめざして、あえて技巧を労する事にした。

#### 一 価値表現

「もし諸物の現われの形態と本質とが直接に一致するものならば、一切の学問は余計なものであろう。」  
(MEW 25, S. 825)<sup>1)</sup>

この一節は、経済学の「学問性」に関するマルクスの見解の核心を表現している。すなわち、諸物の本質と現われの形態とは、単に一致しないばかりでなく、現われの世界は、時としては必然的に、「魔法にかけられ転倒され逆立ちした世界」(MEW 25, S. 838)ですらある。ブルジョアの生産関係にとらわれ、それにとってはこの関係の内的連関が「おおい隠されている」(verborgen sein)ところの生産「当事者たち」(Agenten)の諸観念を無批判に翻訳し体系化し弁護する——これは「俗流経済学」と称せられる——ところに「学問の営み」は成立しない。学問としての経済学の第一の課題は、経済的諸関係の現われの諸形態から、経済的諸関係の本質そのものへと「遡行」ないし「下向する」ことにある。第二の課題は、本質から現われへと「前進」ないし「上向する」(aufsteigen)(MEW 13, S. 632, MEGA II-1.1, S. 36)ところにある。これは、実体が「現われる」(erscheinen)過程であると同時に、本質が現われの内で「おのれを表わす」(sich darstellen)ないしは現われが本質を「表現する」(ausdrücken)過程である。経済学者による「表現」(Ausdruck)ないし「叙述=表われ」(Darstellung)が、同時に実体の「自己表現」ないし「自己叙述=表われ」(Sichdarstellung)=「現われ」(Erscheinung)であるところに、経済学の「学問性」の根拠があるのである。とはいえ、ヘーゲルの論理学が純粹思想の国、「何らの覆いもなく (ohne Hülle) 即自的かつ対自的にそれ自体ある姿での真理」(Werke 5, S. 44)であるのと異なり、経済学の直接の対象は、すでに見たように、諸関係の内的連関が「おおい隠され」、「魔法にかけられ転倒した世界」である。

\* 弘前大学教育学部社会科学科教室 Department of Social Studies, Faculty of Education, Hirosaki University

エンゲルスによれば、経済学は「諸物」をではなく、「人格と人格との諸関係」(Verhältnisse zwischen Personen), 究極においては階級と階級との諸関係を取り扱うのである。しかしこれら関係は、つねに「物に結びつけられ、かつ物として現われる<sup>4)</sup>」(MEW 13, S. 476, MEGA II-2, S. 253) ののである。逆に言えば、諸物に結びつけられず、諸物として現われない「人格相互の諸関係」は、そのかぎりではまだ経済学の直接の対象になりえない。他方、単なる諸物もまた——たとえそれらがすでに人間労働による生産物であろうとも——それだけではまだ経済学の直接の対象ではありえない。経済学の固有の対象は、「諸物に結びつけられた人格の諸関係」ないし「人格の諸関係に結びつかれた諸物」、すなわち、「商品生産者相互の関係」と「商品生産物相互の関係」である。なぜならば、生産物が商品であるのはひとえに、「二人の人格ないし二つの共同体のあいだの関係」、もはや同一の人格のうちで一体になっているのではない「生産者と消費者のあいだの関係」が、「物」すなわち「商品に結びついている」(ebenda) ことによるからである。そこから、経済学の課題と方法も必然的に帰結する。すなわち、諸物として現われ、まさにその事によって諸物の背後に隠れている人格相互の諸関係と諸物との間の「表わしと隠しの論理」を見いだす事がそれである。

『資本論』によれば、商品の「交換価値」ないし「交換関係」は、商品の「価値」の必然的な「表現様式」(Ausdrucksweise) ないし「現われの形態」(Erscheinungsform) である (MEW 23, S. 53)<sup>5)</sup>。資本主義的生産様式の特異性が、「交換価値を生みだす労働」にあるとすれば、『資本論』の全体は、あげて交換価値による「価値の表現」の分析に捧げられていると言って過言でない。それゆえ『資本論』全巻は、「表現と現われの相即の論理」に貫かれた、価値の「表現論」(Ausdruckslehre) ないし「現われの理論」(Erscheinungslehre) だと言う事ができる。

「交換価値」(Austauschwert) は、まずは、ある一種類の「使用価値」(Gebrauchswert) が他の一種類の「使用価値」と交換される「量的関係」すなわち「割合」として「現われる」(erscheinen)。この関係は、時と所とによって絶えず変動する。それゆえ、交換価値は「偶然的なもの」「純粹に相対的なもの」であるように「見える」(scheinen) (MEW 23, S. 50)。このようにして、「商品に内的な、内在的な交換価値」は「形容矛盾」であるように見える。しかし "ein der Ware innerlicher, immanenter Tauschwert" が "valeur intrinsèque" (MEW 23, S. 51) と言い換えられている事から明らかなように、ここにはすでに「価値論的倒錯」(axiologisches Quidproquo) とでも称すべき「価値」と「交換価値」の「取り違え」(quid pro quo) が見られる。価値と交換価値との間の「価値論的差異」(axiologische Differenz) とでも称すべき根本的な差異が隠されたままである。かくして、交換価値の外在性・相対性が価値そのものへと、いわば照りかえし、交換価値の外観がそのまま価値の外観となっているのである。

事態をよく見ると、同じ商品の妥当な諸交換価値は、それとは区別される「一つの同じものを表現している」(ein Gleiches ausdrücken) (ebenda)。すなわち、二つの異なる物の内に「同じ量の共通なもの」が実存している。ところで、諸商品の交換関係そのものの中では、商品の交換価値は、その使用価値にまったく「かかわりのないもの」(Unabhängiges)として「現われている」(erscheinen)。とすれば交換価値は、商品に「表わされている」(dargestellt sein) 労働の有用性の捨象、具体的諸労働の抽象的人間労働への還元を前提している。この交換価値のうちに、あの「共通のもの」が「表われている」(sich darstellen) (MEW 23, S. 53) ののである。それは、商品の「価値」(Wert) である。このようにして交換価値は、価値の必然的な「表現様式」ないし「現われの形態」である。

にもかかわらず、『資本論』はここでさらに、「価値論的還元」(axiologische Reduktion) とでも称すべき還元、すなわち「交換価値の還元」の必要を説いている。すなわち、価値は、「さしあたりまずは」——価値の表現様式ないし現われの形態であるところの——交換価値と「かかわりなし」(unabhängig) に、考察されなければならない (ebenda) と言うのである。使用価値の捨象によって得られた「価値」と、その「価値において表現されている」(im Wert ausgedrückt sein) 労働 (MEW 23, S. 56, 59, 61, usw.) とを、「価値の表現様式」から独立に考察せよ、という奇妙な要請である。これが背理でないとすれば、「交換価値の内での価値の表現」と「価値の内での労働の表現」とが、意味を異にしているのでなければならない。

スピノザによれば、神は「そのおのおのが永遠無限の本質を表現している無限に多くの属性から成り立つ

実体」(第一部、定義六)(Opera II, S. 45)<sup>6)</sup>である。すなわち、属性は実体の「本質」を「表現している」(exprimere)のである。他方、個物は「神の属性の変様」あるいは神の属性が「定められ限られた様態で」(certo, & determinatio modo) 表現されるその「諸様態」(modi)である(第一部定理二五系)(Opera II, S. 68)。すなわち、様態は、実体の本質を表現している属性が表現される「定められ限られた様態」(certus et determinatus modus)である。それは、「実体の本質の属性における表現」の「制限」(modus)であり、その意味で「諸属性の諸変様」(attributorum affectiones)である。あるいは、端的に「実体の諸変様」(substantiae affectiones)(第一部定義五)(Opera II, S. 45)である。

『エチカ』のこの表現論は、『資本論』の表現論と無縁でない。すなわち、労働は価値の実体である。<sup>7)</sup> 価値は労働の属性である。価値は労働の本質を表現している。<sup>8)</sup> 交換価値は価値の変様である。交換価値は、価値を一定の仕方<sup>9)</sup>で表現する様態である。かくして、『資本論』における「表現するものと表現されるものとの関係」には三つの類型がある。第一に、価値が労働(の本質)を表現する。第二に、交換価値が(労働の属性である)価値を(一定の様態において)表現する。第三に、労働生産物(ないし商品)が(価値として)<sup>10)</sup>労働を表現する。

価値を交換価値とかかわりなしに考察する事は、第一の類型を第二の類型とは独立に論じる事である。これは、価値のうちに表現されているかぎりの労働を、価値の実体として把握し、この労働の本質をそのものとして「明らかにする」ために不可欠な操作であった。あるいは、そもそも「使用価値の還元」そのものが、「交換価値の還元」すなわち「価値論的還元」にまで進む事なしには不可能なのである。なぜなら、後に見るように、「一商品の価値は他の商品の使用価値で表現される」(MEW 23, S. 66)しかないからである。すなわち、価値の実体としての労働ないし労働の本質は「価値において」(使用価値の捨象において)表現されうる。しかしながら、価値そのものが「価値において」(使用価値の捨象において)表現される事はあり得ない。価値は諸商品の交換関係の内に「表われる」(sich darstellen)のであり、交換関係は異なる種類の労働の生産物、異なる種類の使用価値の間でしか現実性を持ち得ないからである。

そもそも、「価値」とは何か。それは、「同等な抽象の人間労働」という「社会的実体」の属性である。労働生産物はこの実体の「結晶」として「価値である」と言われる。<sup>11)</sup>物が価値であるのは、それが「結晶した労働」、「凝結した労働」であるかぎりである。では、なぜ、労働の属性が価値なのであろうか。なぜ、労働の本質が価値において表現されているのだろうか。なぜ、労働の結晶が価値なのだろうか。明らかに、ここで問題となっているのは、「価値-商品価値」(Werte-Warenwerte)(MEW 23, S. 52)<sup>12)</sup>である。「価値がある」事と「商品価値がある」事とは如何なる関係にあるのだろうか。ある物が「価値がある」ためには、それは人間労働に媒介されていなければならない。かつそれは有用でなければならない。ある物は「価値である事なしに使用価値である」事ができる。しかし、「使用価値である事なしに価値である」事はできない。他方、ある物は「商品である事なしに、有用であり、かつ人間労働の生産物である」(MEW 23, S. 55)事ができる。とすれば、問題はすでに決着しているかに見える。すなわち、ある物は「商品価値である事なしに価値である」事ができるかに見える。しかしながら、その有用性がその生産物の使用価値に、あるいはその生産物が使用価値であるという事において「表われている」(sich darstellen)労働は具体的「有用労働」(MEW 23, S. 56)である。これに対して、価値において「表現されている」労働、価値を形成する実体は「抽象の人間労働」(MEW 23, S. 52)である。この「抽象」は現実の商品交換関係の中で遂行されるのである。それゆえ、この労働は、すでに「社会的実体」(ebenda)として語られていたのである。価値は「商品」の価値である。価値は、それ自身が、「人間労働と人間労働との社会的関係の表現」であるがゆえに、商品と商品との社会的関係、すなわち「交換関係」を必然的に前提しているのである。価値の概念のうちには、交換価値という形態において現われる事が、あらかじめ含まれているのである。交換価値が価値の現われの「必然的」な形態であるのは、まさにそのゆえである。

にもかかわらず、商品と商品との「社会的関係」(MEW 23, S. 62)としての「交換関係の還元」が求められていた。「価値論的還元」は、価値が現われにおいて初めて社会的であるがゆえに「可能」なのではない。この還元は、価値がその実体において既に「純粹に社会的である」(ebenda)がゆえに「必要」なのである。この意味で、それは、「方法的」な還元である。「価値論的還元」によって、如何なる還元によ

でも還元しつくせないところの「価値の社会的性格」が、かえって顕わになるのである。<sup>13)</sup>

価値は、交換価値において「現われている」と同時に、そこにおいて「隠れて」もいる。<sup>14)</sup> 剰余価値と利潤との関係についても同様である。剰余価値の転化形態ないし現われの形態である利潤において、剰余価値の「源泉」もその「存在の秘密」も「おおい隠され消し去られている」。剰余価値は分析によって初めて、利潤から「むきだされる」のでなければならない。これに対して、剰余価値では「資本と労働との関係」が「むきだしになっている」(bloßgelegt sein) (MEW 25, S. 58)のである。価値においては、その実体たる労働の本質(一般性、抽象性、社会性等々)が、まがう事なく「表現されている」。そのようにして、抽象的人間労働そのものが諸価値の実体として「これらの価値において表われている」(sich in diesen Werten darstellen) (MEW 23, S. 59)のである。

「表わし」(Darstellung)ないし「表われ」(Sichdarstellung)にも、「表現」(Ausdruck)の場合と同じく三つの類型が認められる。すなわち、第一に、労働が価値において表われる。<sup>15)</sup> 第二に、価値が交換価値において表われる。<sup>16)</sup> 第三に、労働が労働生産物において表われる。<sup>17)</sup> 「表現」と「表わし」との関係は必ずしも一義的でないが、たとえば、属性が実体の「本質を表現する」その同一の働きによって、その属性において「実体がおのれを表わす」のである。どちらかと言えば表現が「本質の把握」に重点があるのに対して、「表わし」は「実体の顕現」ないし「臨在」と深く関わっていると思われる。「表現」の固有の領域は第一の類型に、「表わし」の固有の領域は第三の類型に求める事ができる。これに対して「現われ」(Erscheinung)の固有の領域は第二の類型にある。あるいはむしろ、「現われ」に関しては、三つの類型の区別を語る事ができない。当然の事ながら第一の類型が完全に欠落している。すなわち、労働(の本質)が、「価値において表現されている」(ausgedrückt sein)、実体たる労働が「価値において表われている」(sich darstellen)とは言われても、労働が「価値において現われている」(erscheinen)と言われることはありえないのである。「現われ」のこの特異性のゆえに、われわれは「価値実体論」とでも称すべき考察を離れ、「価値形態論」へと移らなければならない。それがまた『資本論』が要求している順序でもある。

一商品の価値は如何なる形態において表現されるのであろうか。まず第一に、一商品の価値をその商品自身で表現する事はできない。「20エレの亜麻布=20エレの亜麻布」は、何ら「価値表現」ではない。「絶対的価値形態」は背理である。たとえば「20エレの亜麻布=一着の上衣」のみが価値表現である。すなわち、一商品の価値は、「ただ相対的に、すなわち別の商品においてのみ」(MEW 23, S. 63)表現されるのである。一商品の「相対的価値形態」はそれとは別の一価値がそれに対して「等価形態」にある事を前提している。等価形態にあるこの商品は、同時に相対的価値形態にある事はできない。それは「自分の価値を表現している」(ebenda)のではない。それは、それとは別の商品の価値表現に材料を提供しているにすぎない。上述の例では、亜麻布と上衣との量的関係はどうであれ、亜麻布の「価値」が上衣の身体において、上衣の「使用価値」において表現されている。かくして、亜麻布は、その「自然形態とは別の価値形態」(MEW 23, S. 66)を受け取る。すなわち、上衣の「自然形態」がそのまま亜麻布の「価値形態」となる。上衣は、その「物的形態とは別の価値形態をとる事なしに」(MEW 23, S. 70)そのありのままの姿において、亜麻布商品に等しいとされる。

等価形態の第一の特異性は、「使用価値がその反対物、すなわち価値の現われの形態になる」(ebenda)<sup>18)</sup>事にある。商品Bの「自然形態が価値形態となる」この「取りかえ」(Quidproquo) (MEW 23, S. 71)は、他の一商品Aが商品Bに対してとる「価値関係」の中でのみ起こる事である。いかなる商品も等価としての自分自身に關係する事はできない。自分自身の自然形態を自分自身の価値形態にする事はできない。いかなる商品も自分自身に關係するためには他の商品を等価としなければならない。すなわち、他の商品の自然形態を自分自身の価値形態にしなければならない。交換関係の外でのこの“Quidproquo”はもはや「取り違え」ないし「倒錯」以外の何ものでもない。ところで、相対的価値形態においては、まだしも、その価値表現は、それが「ある社会的関係を隠している」(ein gesellschaftliches Verhältnis verbergen) (ebenda)事を暗示している。なぜなら、たとえば、亜麻布の「価値存在」は、亜麻布自身の身体やその諸属性とは「まったく異なったもの」として表現されているからである。これに反して等価形態においては、あの社会的関係の痕跡は消えている。なぜなら、たとえば、上衣という「このあるがままの姿の物」(dies Ding wie

es geht und steht) (MEW 23, S. 72) が価値を表現している事、それが「生まれながらに」(von Natur) 価値形態をもっている事によって、等価形態は成立しているのだからである。かくして、上衣は、その等価形態、「直接的交換可能性」という属性を、——重さがあるとか保温に役立つとかという属性と同じように——「生まれながらに」持っているように「見える」(scheinen) のである。そしてまさにそこに、「等価形態の不可解さ」(Rätselhaftes der Äquivalentform) (ebenda) の源があるのである。もっとも単純な価値形態のうちに「一切の価値形態の秘密」(Geheimnis aller Wertform) (MEW 23, S. 63) がひそんでいると言われた事も、この事態を指していたのである。もっとも単純な価値表現がすでに「等価形態の謎」(MEW 23, S. 72) を解くようにうながしていたのである。

商品世界においてひとびとは、彼らの労働生産物の交換によって「初めて」社会的接触を結ぶ。ひとびとは、彼らの異なる種類の諸生産物を交換において互いに「価値として等置する」。そして、そのことによってのみ、彼らの異なる諸労働を互いに「人間労働として等置する」(MEW 23, S. 88) のである。それゆえ、「価値とは人格と人格との関係である」にせよ、生産物の交換に媒介され、その「物的外皮の下に隠された関係」(ebenda) である。生産当事者たちにとっては、彼らの「私的諸労働の社会的諸連関」は、「諸人格の、彼らの諸労働それ自体における直接に社会的な諸関係」として「現われる」のではなく、「諸人格の物件の諸関係」(sachliche Verhältnisse der Personen) ならびに「諸物件の社会的諸関係」(gesellschaftliche Verhältnisse der Sachen) (MEW 23, S. 87) として「現われる」他ないのである。なぜなら、それが商品生産者の私的労働相互の社会的諸連関の「あるがままの姿」(das, was sie sind) (ebenda) だからである。彼らの私的労働の生産物が「商品」という形態をとるかぎり、一商品の価値が「別の」一商品の「自然的形態」において表現される事は必然的である。価値が「物において現われる」事なしには、労働の本質が価値において表現されている事の発見もありえない。逆に、労働諸生産物が「価値であるかぎりでは」その生産に支出された人間労働の「単に物件的な表現」(bloß sachliche Ausdrücke) (MEW 23, S. 88) であるという発見も、商品価値の運動が「物件の運動という形態」(MEW 23, S. 89) をとって「現われる」事を廃止する事はできない。商品生産関係にとらわれている人々にとっては、この「現われ」が決定的に見える。それだけにまた、その現われの物件的運動の背後に隠れているその運動の秘密、すなわち「労働時間による価値量の規定」(ebenda) を剥きだしにする「方法的還元」が、一層不可欠なのである。

## 二 意味表現

『論理学研究』によれば、あらゆる作用は「客観化する作用」(objektivierender Akt) であるか、さもなければ客観化する作用をその基礎に持っている。ところで、客観化する作用はそれ自身のうちに「代表」(Repräsentation) を含んでいる。とすれば、この「代表」という意味での「表象」(Vorstellung) が、<sup>19)</sup> 一切の作用の究極の基礎をなしているわけである (HU 19, S. 624)。

作用は「作用性質」(Aktqualität) と「代表」との統一である。作用性質には、たとえば、「信ずる」、「単に想い浮かべる」、「願う」、「疑う」、等々が区別される。代表は、「質料」(Materie) と「代表する内容」(repräsentierender Inhalt) との統一である。「まるごとの作用」(voller Akt) は「直感作用」(intuitiver Akt) と「記号作用」(signitiver Akt) に区別される。この区別は、作用に内在する「代表」<sup>20)</sup> によって規定されている。たとえば、「知覚」(Wahrnehmung)、「想像」(Phantasie)、「想起」(Erinnerung) 等々が直感作用である。代表は、「直感的代表」(intuitive Repräsentation) と「記号的代表」(signitive Repräsentation) に区別される。前者は端的に「直感」(Intuition) と呼ばれる。しかし、まるごとの作用である「直観」(Anschauung) と区別するために「直感表象」と言う事にしよう。後者も端的に「Signifikation」と呼ばれている。これは「記号表象」と言う事にしよう。直感表象は「知覚表象」(Perzeption)、「想像表象」(Imagination) 等々に区別される。「知覚」(Wahrnehmung) は、「知覚表象」(Perzeption) と「作用性質」との統一である。「想像」(Phantasie) は「想像表象」(Imagination) と「作用性質」との統一<sup>22)</sup> である。「直感表象」(Intuition) は総じて「直感的に代表する内容」(intuitiv repräsentierender Inhalt) と「質料」との統一である。「直感的に代表する内容」は、「表わす内容」(darstellender Inhalt) (HU 19, S. 609)、「シルエットを描く内容」(abschattender Inhalt) とも呼ばれる。「知覚表象」(Perzeption) にお

けるそれは、「知覚的に代表する内容」(perzeptiv repräsentierender Inhalt),「知覚的に表わす内容」(perzeptiv darstellender Inhalt),「知覚的にシルエットを描く内容」(perzeptiv abschattender Inhalt),「自体を表わす内容」(selbstdarstellender Inhalt),「直示する内容」(präsentierender Inhalt)と呼ばれる。<sup>24)</sup>

以上, 明らかなように, 「直感的代表」(intuitive Repräsentation) ないし「直感表象」(Intuition) と「表わし」(Darstellung) ならびに「シルエットを描くこと」(Abschattung) とは, 同じ事態の異なった表現である。

「作用性質」と「質料」の統一は「志向的本質」(intentionales Wesen) である。「志向的本質」と「表わす内容」との統一が「認識的本質」(erkenntnismäßiges Wesen) である。「統握される内容」と「統握」との統一が作用の「内実」(Gehalt) を成す。「統握される内容」が「表わす内容」であるなら, それは作用の「直感的内実」(intuitiver Gehalt) である。作用の「純粹に直感的な内実」は, 「現われに落ちる」(in die Erscheinung fallen) (HU 19, S. 610) 対象の諸規定の集合に対して作用において対応するもの, である。作用の「表わす内容」が統握される事によって, この内容が対象の対応する内容を「現実に表わす」(wirklich darstellen)。まさにその事によって, 対象の対応する内容が「現実に現われて来る」(wirklich zur Erscheinung kommen)(HU 19, S. 611), あるいは「純粹に直感表象されて来る」(zu reiner Intuition kommen) (HU 19, S. 612) のである。

これによって見れば, 「表わし」(Darstellung) と「現われ」(Erscheinung) とは, 同一の事態を互いに逆の方向から表現したものにすぎない。

「直感表象」(Intuition) が, 「質料」と「直感的に代表する内容」すなわち「表わす内容」(darstellender Inhalt) の統一であったのに対して, 「記号表象」(Signifikation) は, 「質料」と「記号的に代表する内容」(signitiv repräsentierender Inhalt) との統一である。「記号作用」の「記号的に代表する内容」は同時に, この記号作用を「基づける直観」(fundierende Anschauung) すなわち「記号の直観」(Anschauung des Zeichens) の「直感的に代表する内容」でもある。「記号表象」における「質料」と「代表する内容」との関係は, 「直感表象」のそれが「本質的, 内面的」であったのに対して, 「偶然的, 外面的」(HU 19, S. 622) である。「記号表象の質料」(signifikative Materie) と言えども, 何らかの「代表する内容」に支えられなければならない。しかしながら, 任意の内容が, 「記号的に代表する」内容たりうるのである。たとえば, 「意味<sup>B</sup>」(Bedeutung) と言えども, 「宙に浮いている」わけにいかない事に変わりはない。しかしながら, 「記号」そのものは, その記号の「意味<sup>B</sup>」が「意味<sup>B</sup>している」(bedeuten) ものにとって, まったく「どうでもよい」(gleichgültig)。どのような記号でも, 同じ効果を發揮する, すなわち同一の「意味<sup>B</sup>機能」(Bedeutungsfunktion) を果たす事が可能である。任意の記号によって, 同一の対象が同一の仕方で「表象」されうるのである。ただし「記号的に」(signitiv)。

まさにそのゆえに, 「記号的に表象された」対象は, 「現実に現われている」(wirklich erscheinen) わけではない。「現実に現われている」のは, 対象そのものではなく「記号」である。「記号を介して表象されている」対象は, 「示唆」(hindeuten) されているにすぎない。記号的に代表する内容は, 唯一「示唆機能」(Hindeutungsfunktion) にある。「記号の直観」がそのまま記号作用の「対象の直観」であるのではない。記号作用そのものに対して, 記号の直観は, 如何なる充実関係にもない。記号作用の対象は「厳密には表わされるに至らない」(nicht zu eigentlicher Darstellung kommen) (HU 19, S. 609) 諸部分ないし諸側面から成っている。それゆえに, 「意味<sup>B</sup>作用」(Bedeuten) にとって, 本質的であるのは, 「記号」でも「対象」でもなく, 「意味<sup>B</sup>」(Bedeutung) そのものであると言われたのである。記号作用の対象は, そのかぎりにおいては, 如何なる仕方においても「表わされて」(dargestellt) いない。したがってまた, 「現われて」(erscheinen) もいない。直感作用の対象のみが「表わされている」。したがってまた, 「現われている」。すでに見たように, たとえば「想像」は, 「模写する」(abbilden) ないし「類似する」(analogisieren) という仕方, 「知覚」は「自体を表わす」(selbstdarstellen) ないし「直示する」(präsentieren) という仕方, それぞれの対象の諸側面を「表わしている」。したがってまた, 対象の諸側面が, それぞれの仕方「現われている」。たとえば, 知覚においてのみ, 対象の「自体が現われる」。想像や記号作用においてさえ,

「自体が現われる」事がありうる。しかしそれは、「写像」ないし「記号」の自体であって、記号や写像を「介して」表象される「対象」の自体ではないのである。

以上、われわれは、「直感的代表」(intuitive Repräsentation) ないし「表わし」(Darstellung) と「現われ」(Erscheinung) との「普遍的相関」の関係を見て来た。しかしながら、最も広い意味で言えば、「Vorstellung」も「Repräsentation」も「Darstellung」も、さらには「Ausdruck」をも含めて、「表わし」ないし「表現」として包括する事ができる。そして、そのそれぞれを「表わしの諸様態」ないし「表現の諸様態」と見なし、それらに対して同様に広い意味での「現われの諸様態」が相関していると考える事も可能である。<sup>26)</sup>

たとえば、ライプニッツにおいて、“expression” と “representation” とは、微妙なずれを見せながら、ほぼ同じ事態を意味している。まず、あるものが他のものを “exprimer” している、と言えるのは、<sup>27)</sup>「一方について言える事と他方について言える事との間に、恒常的法則的關係が存する」(G II, S. 112) ときである。ところで、「知覚」(perceptio) とは、「一の中における多の表現」(multarum in uno expressio) (G II, S. 311)<sup>28)</sup>にほかならない。他方、「知覚」(perception) とは、「一」すなわち「単純な実体」の中に「多」を含み、かつ「多」を「representer」(G VI, S. 608)<sup>29)</sup>する推移的な状態にほかならない。あるいはまた、「魂自身の根源的な構造」すなわち、自分の外にある存在を自分の器官に応じて、「表現する」(exprimer) 事のできる「nature representative」(G IV, S. 484)<sup>30)</sup>。同一の都市でもそれを見る人々の位置が異なるに従って、さまざまに「representer」されるように、おのおの実体はそれなりに全宇宙を「表現する」(exprimer) (G IV, S. 434)<sup>31)</sup>。分割可能な物質的なもの、そしていくつかの存在のうちに散乱しているものが、唯一の不可分の存在<sup>27)</sup>、あるいは真の統一を授けられた実体の中に、「exprimer ないし representer されている」(G II, S. 112)<sup>32)</sup>。とさえ言われている。これによって見れば、ライプニッツにおける「expression」と「representation」の親縁性は明らかである。

さらに、「表現」(Ausdruck) と「現われ」(Erscheinung) との相関に関しても、ライプニッツのうちに、興味ある示唆が見い出される。実体におこるすべての事、すなわち、それがもつ「あらゆる現われないし表現」(toutes les apparences ou expressions) (G IV, S. 485)<sup>30)</sup>という一節がそれである。「現われ」(apparence) は、他の被造物の助けなしに順序をおって産出する事ができる実体の「内的な本性」ないし「力」によって産出される。いわば「夢のようなもの」となって「現われる」(se presenter) (G IV, S. 476)<sup>33)</sup>にせよ、それは、何の根拠もない単なる「見かけ」にすぎないのではない。「夢」は、「あるいはむしろ内的な現象」(ou plutost phenomenes internes) と、ただちに言い換えられている。この現象は、規則的であり、かつきわめて「真」であるがゆえに予見可能である。この「真実に見えているものと見せているものとの相関」が “toutes les apparences ou expressions” によって表現されていたのである。<sup>34)</sup>

『論理学研究』で確認されたところの「表わし」(Darstellung) と「現われ」(Erscheinung) との普遍的相関は、当然の事ながら、『イデーニ』においても維持されている。たとえば、「感覚与件」は、知覚の具体的統一において、統握によって生気づけられることによって、「表わす機能」(darstellende Funktion) (HU 3, S. 86)<sup>35)</sup>を果たしている。あるいは、この「表わす機能」と一体になって、色彩や形態等々「の現われ」(Erscheinen von)(ebenda) が形成される。すなわち、「彩り」や「ざらざら」などといった物的契機が「現われている」(erscheinen) のも、それらが「色彩与件」、「感覚与件」、「音響与件」等々の「感覚内容」(Empfindungsinhalt) を介して、「体験においておのれを“表わしている”」(sich erlebnismäßig “darstellen”) (HU 3, S. 192) からである。

ところで、この「表わしと現われとの普遍的相関」は、『論理学研究』とは違って、『イデーニ』においては、単に「ノエシス論」(Noetik) の視点からでなく、「ノエマ論」(Noematik) の視点から展開されている。

まず、ノエマ的な「対象自体」(Gegenstand schlechthin) と「その諸規定性の様態」(Wie seiner Bestimmtheiten) との統一が「意味<sup>s</sup>」(Sinn) (HU 3, S. 303) と呼ばれる。ノエマ的な「対象自体」は、「中心的な統一点」、「諸述語の結合点」、「諸述語の主語」、「意味<sup>s</sup>の必然的な中心」、「統一点」、「純然たる

規定可能なX, 「意味<sup>S</sup>の担い手」, 「空虚なX」と言われる。<sup>36)</sup>ノエマ的な「意味<sup>S</sup>」ないし「対象の意味<sup>S</sup>」は, 「その諸規定性の様態における対象」として, 「様態における対象(1)」である。これに対してこの「意味<sup>S</sup>」と「その所与性諸様式の様態」との統一, すなわち, 「その所与性諸様式の様態における対象」(Gegenstand im Wie seiner Gegebenheitsweisen) (HU 3, S. 304) は, 「様態における対象(2)」である。まさしく, それが, ノエマの「まるごとの核」(voller Kern)(ebenda)を成している。「所与性諸様式」とは, たとえば, 対象が「知覚的」, 「想起的」, 「明瞭に直観的」, 「思考的」等の仕方与えられるその様式である。ここでは, 「注意の諸変様」は捨象されている。ノエマの「まるごとの核」は, 「その充実の様態における意味<sup>S</sup>」(Sinn im Modus seiner Fülle) (HU 3, S. 305) とも呼ばれる。

一方, 「意味<sup>S</sup>」と「定立的性格」(thetischer Charakter)との統一が「命題」(Satz) <sup>37)</sup>(HU 3, S. 305)である。「命題」と「充実」(Fülle)との統一が「充実された命題」(erfüllter Satz) (HU 3, S. 315)である。

単なる「意味<sup>S</sup>」ないし「命題」は「単なる抽象物」である。「意味<sup>S</sup>」は「まるごとのノエマ」(villoes Noema) (HU 3, S. 299) <sup>38)</sup>の「抽象的形式」(HU 3, S. 304)にすぎない。たとえば, ノエマの「まるごとの核」である「知覚された対象そのもの」(wahrgenommener Gegenstand als solcher)から, 「知覚された」という性格を捨象する事によって, 「対象の意味<sup>S</sup>」を「直観的にひきだす」(herausschauen)事ができるのである。逆に, この「意味<sup>S</sup>」をその「直観的充実」もろともに「まるごと受けとる」(voll nehmen)なら, そこに「現われ」(Erscheinung) (HU 3, S. 306)という概念が生ずるのである。

たとえば, 「空間表象の起源」の問題についていえば, それは詰まるところ, その中で空間が直観的に「表われ」(sich darstellen), その中で空間的なものが, 「諸々の現われの統一」(Einheit der Erscheinungen)として, つまり「記述的な表わしの諸様式の統一」(Einheit der deskriptiven Darstellungsweisen)として「おのれを“構成する”」(sich “konstituiert”) (HU 3, S. 351), そのような一切のノエマ的(ないしはノエシス的)諸現象の現象学的本質分析に帰着する。「現われの統一」がただちに「記述的な表わしの様式の統一」と言い換えられうるのも, 「表わされる」(sich darstellen)事が, 「おのれを表わす」事として, そのまま「現われる」ことを意味するからである。そして, そのかぎりにおいて, 「表われ」(Darstellung)と「現われ」(Erscheinung)とのあの相関が, 普遍的なのである。

この「表われと現われの普遍的相関」と「表現」とは, 如何なる関係にあるのだろうか。ある意味で, 「表現」(Ausdruck)は「論理的な表われ」(logische Darstellung)である。

「意味<sup>S</sup>」は, あらゆるノエマに内在する一種の「抽象的形式」である。まず第一に, 「意味<sup>S</sup>」は, 「解説し概念把握する一切の思考に先立って」(HU 3, S. 306), あらゆるノエマのうちに横たわっているものである。あらゆる志向的体験は, そのノエマを持ち, ノエマの核を持つ。この「意味<sup>S</sup>を通じて」, 体験は「対象へ関係する」のである。対象であるとは, 「意識の対象」である事である。「世界」および現実一般は, 現実的および可能的意識の枠内で, 多少とも「直観的内実」をもって「充実された」対応する「意味<sup>S</sup>ないし命題を通じて」, 「代理されなければならない」(vertreten sein muß) (HU 3, S. 310)。たとえば, 現実の自然的な物はすべて, 「まるごとの核」の多様を通じて, 「代理される」。あるいは, それらの物が同一なものとしてその中でノエマ的に構成されるところのあらゆる可能的・主観的な「現われの諸様式」を通じて, 自然的な物は「代理される」のである。「現われ」による「対象」の「代理」(Vertretung)と, 『論理学研究』における「直感的代表」(intuitive Repräsentation), それゆえ, 「直感的表象」(intuitive Vorstellung)とは同じ事態を表わしている。

「表現」は, 「非表現的直観」(unausdrückliche Anschauung)が, その「意味<sup>S</sup>」において「表わしている」(darstellen)まさにこの同一の対象を, その「意味<sup>B</sup>」(Bedeutung)において「意味<sup>B</sup>している」。

「表現」によって「表現されているもの」, 「意味<sup>B</sup>」によって「意味<sup>B</sup>されているもの」としてのこの「対象」は, 単なる「空虚なX」ではなく, 「その諸規定性の様態における対象」であった。「まるごとのノエマ」の「中心的な“核”」をなしているこの「対象の意味<sup>S</sup>」は「明瞭性の充実」(Klarheitsfülle)の諸区別ないし当該ノエマの具体化の差異, たとえば, 知覚, 想像, 記憶等々の相違にもかかわらず「全く同一の客観的表現でもって記述可能なもの」(HU 3, S. 210)である。さらに, この「ノエマ的核」の同一性は, 「注意の様態の諸変動」によっても損なわれる事はない。注意の変様にもなう「明るさと暗さ」(Helligkeit

und Dunkelheit) (HU 3, S.213) の変様は、「現われているもの」を「その固有の意味<sup>S</sup>の成素の面で」(nach seinem eigenen SINNESbestand) 変様させるものではなく、「現われているもの」の「現われの様式」を変様させるにすぎないのである。「形式論理学」(formale Logik)——すなわち、「普遍学」(mathesis universalis) の中の「述定的意味<sup>B</sup>」(prädikative Bedeutungen) (HU 3, S.218) に関する学科——にとっては、「判断」の「まるごとの“意味”」(VOLLER“Sinn”) (HU 3, S.221) ではなく、その同一の「意味<sup>S</sup>の核」(Sinneskern) (HU 3, S.218), その「ノエマの本質」(noematisches Was) (ebenda) のみが決定的なのである。同じ事であるが、「表現」(Ausdruck) とその「意味<sup>B</sup>」(Bedeutung) にとって決定的であるのも、まさにこの同一の「意味<sup>S</sup>の核」のみである。<sup>39)</sup>

われわれは、「知覚」(Wahrnehmen), 「想起」(Erinnern), 「想像」(Phantasieren) 等々を「表現する」(ausdrücken)。そのとき、われわれは、「知覚の表現」, 「想起の表現」, 「想像の表現」, あるいは「表現された知覚」(ausdrückliches Wahrnehmen), 「表現された想起」(ausdrückliches Erinnern), 「表現された想像」(ausdrückliches Phantasieren) を持つ。「表現する」とは、「概念化する」, 「一般化する」, 「理念化する」, 「論理化する」事である。そしてまさにその事によって、「非表現的作用」(unausdrücklicher Akt) を「表現された作用」(ausdrücklicher Akt) にする, すなわち, 「はっきりと表に現わす」(ausdrücklich machen) のである。「非表現的作用の意味<sup>S</sup>」(unausdrücklicher Sinn) をはっきり表に現わしている意味<sup>S</sup>, ないしは, 「はっきりと表に現われているところの非表現的作用の意味<sup>S</sup>」すなわち「ausdrücklicher Sinn」ないし「logischer Sinn」, それが, 端的に「Bedeutung」(意味<sup>B</sup>)なのである。

Bedeutung は ausdrücken する。すなわち, ausdrücklich machen する。Bedeutung のうちにこそ Ausdrücken の核心が存する。「意味<sup>B</sup>」は「意味<sup>B</sup>する」。「意味<sup>B</sup>されているもの」(Bedeutetes), それは, 非表現的作用の「意味<sup>S</sup>」である。それは「思念されたものそのもの」, 「対象の意味」, 「その諸規定性の様態における対象」である。

非表現的作用のノエマがすでに「意味<sup>S</sup>」を介して「対象に関係している」がゆえに, そして「意味<sup>B</sup>」が「意味<sup>S</sup>」を「意味<sup>B</sup>している」がゆえに, 表現が「意味<sup>B</sup>」を介して「対象に関係する」事が可能なのである。しかも, 対象へのこの関係は, 非表現的作用における「表われ」と「現われ」の相関の中で初めて, 本来的に実現されるのである。

## 結論

以上の考察は次の事を明らかにした。

第一に、『資本論』の「価値論」は「表現論」として読みかえす事ができる。価値はそれの実体たる労働の本質を「表現している」(ausdrücken)。価値は抽象的人間労働というその実体において既に社会的であるがゆえに, 必然的に交換価値において「現われる」(erscheinen)。この「現われ」(Erscheinung) が必然的であるのは, 商品生産者にとっては, 一商品の価値を別の商品の自然的形態において「表わす」(darstellen) 事が必然だからである。商品生産者は, 異種の生産物を価値として等置する事によって, 異種の労働を人間労働一般として等置する。この「表われ」(Darstellung) のゆえに, 価値および労働が諸物件において, ないしは, 諸物件として「現われる」のである。この「現われ」をくぐり抜け, この「現われ」をひとたびは還元する事によって, この「現われ」の秘密をなすところの価値における労働の「本質」の「表現」(Ausdruck) の世界へ参入し, そこから再び, あたかも「アブリオリな構成」(MEW 23, S.27) によるかの如くにして, 「現われ」の世界を再構成する事が可能になるのである。

第二に、『論理学研究』によれば, 「現われ」(Erscheinung) は「表われ」(Darstellung) と「普遍的相関関係」(universale Korrelation) にある。「現われる」(erscheinen) 事と「表わす」(darstellen) 事とは, この関係の切り離された二つの項なのではない。「現われる」(erscheinen) 事は, われわれにとっては, 「現われているもの」(Erscheinendes) が「おのれを表わす」(sich darstellen) 事として「現われる」。「論理学研究」において「ノエシス論」の視点から確認されたところのこの「現われと表わしの普遍的相関」が, 『イデーニ I』においては「ノエマ論」の視点から展開される。単なる「意味<sup>S</sup>の核」(Sinneskern) においては, 「の現われ」(Erscheinen von) について語る事はできない。「充実された意味」(erfüllter Sinn)

において初めて、「対象」が「本当に現われている」(wirklich erscheinen) と言い得るのである。「表現」(Ausdruck) の「意味<sup>B</sup>」(Bedeutung) は「非表現的作用の意味<sup>S</sup>」(unausdrücklicher Sinn) を「表現している意味<sup>S</sup>」(ausdrücklich machender Sinn) ないし「表現されている意味<sup>S</sup>」(ausdrücklicher Sinn) である。「表現」ないしその「意味<sup>B</sup>」(Bedeutung) は、「非表現的意味」を「意味<sup>B</sup>している」(bedeuten)。それが対象を「現実の意味<sup>B</sup>する」(wirklich bedeuten) 事は、「非表現的意味」が充実され、対象が「現実に現われる」(wirklich erscheinen) 事なしにはありえない。にもかかわらず、表現の固有の「意味<sup>B</sup>機能」(Bedeutungsfunktion) は、「現われ」の還元において初めて、そのものとして概念されうるのである。

## 注

- 1) Karl MARX: DAS KAPITAL, Kritik der politischen Ökonomie, Dritter Band, Buch III, Der Gesamtprozeß der kapitalistischen Produktion; Karl Marx-Friedrich Engels Werke (以下 MEW と略記する), Band 25, Dietz Verlag, Berlin, 1977. — 翻訳については『マルクス = エンゲルス全集』大月書店刊, を参照したが, いくつかの箇所のことわりなしに変更を加えた。——われわれは, これに呼応する表現を, 初期フッサールの労作『算術の哲学』の中にはやくも見いだすことができる。すなわち, 「われわれが数列の最初の諸数と同じようにすべての数について本来的表象を持つのであれば, いかなる算術も存在しないであろう —— それはまったく余計なものであろうから。」—— Edmund HUSSERL: PHILOSOPHIE DER ARITHMETIK (1890~1901); Husserliana (以下 HU と略記する), Band 12, Martinus Nijhoff, Den Haag, 1970, S. 191. ———— というのがそれである。
- 2) Karl MARX: EINLEITUNG ZUR KRITIK DER POLITISCHEN ÖKONOMIE; Marx-Engels Gesamtausgabe (以下 MEGA と略記する), Zweite Abteilung, "Das Kapital" und Vorarbeiten, Band 1, Karl Marx Ökonomischen Manuskripte 1857/58, Text Teil 1. — 翻訳は, マルクス『資本論草稿集』大月書店刊を参照した。——
- 3) この点で, ヘーゲルが論理学の内容を「自然と有限な精神の創造以前の自己の永遠な本質の中にある姿での神の表わし」(die Darstellung Gottes, wie er in seinem ewigen Wesen vor der Erschaffung der Natur und eines endlichen Geistes ist.) (Werke 5, S. 44) —— G. W. F. HEGEL: WISSENSCHAFT DER LOGIK 1; Werke in zwanzig Bänden (以下 Werke と略記する) 5, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1979 —— と規定している事は示唆的である。
- 4) Friedrich ENGELS: KARL MARX, ZUR KRITIK DER POLITISCHEN ÖKONOMIE.
- 5) Karl MARX: DAS KAPITAL, Erster Band, Der Produktionsprozeß des Kapitals. — 翻訳については, 先にあげたものの他長谷部文雄訳 角川文庫版『資本論』(一)を参照した。——
- 6) Baruch de SPINOZA: ETHICA; Spinoza Opera, Herausgegeben von Carl Gebhardt, Heidelberg, Carl Winters Universitätsbuchhandlung (以下 Opera と略記する), Band II, 1972. — 翻訳は, 『世界の名著25』中央公論社刊を参照した。——
- 7) 「われわれは今では価値の実体を知った。それは労働である」(MEW 23, S. 55)。労働生産物は, それらに共通な「社会的実体の結晶として価値 - 商品価値である」(MEW 23, S. 52)。それらの価値の大きさは, それらに含まれているところの「“価値を形成する実体”の量, すなわち労働の量」(MEW 23, S. 53)によって計られる。等々。
- 8) 「労働も, それが価値において表現されているかぎりでは (die Arbeit, soweit sie im Wert ausgedrückt ist), もはや, 使用価値の生みの母としてのそれらに属するような特徴をもってはない」(MEW 23, S. 56)。
- 9) これについては, すでに交換価値が価値の必然的な「表現様式」(Ausdrucksweise) である事が語られていた。「Ausdrucksweise」を「表現様態」と訳す事も十分可能である。
- 10) 「価値としては, 上着と亜麻布とは, 同等な実体からなる物であり, 同等な種類の労働の客観的な表現である」(MEW 23, S. 58)。「商品は人間的労働という同じ社会的単位の表現であるかぎりでのみ価値対象性を有する」(MEW 23, S. 62)。等々。
- 11) 「流動状態にある人間の労働力, すなわち人間労働は, 価値を形成するが, しかし価値ではない。それは, 凝固状態において, 対象的形態において, 価値になるのである」(MEW 23, S. 65)。
- 12) 「価値存在」(Wertsein) (MEW 23, S. 70), 「価値である」(Wert sein) (MEW 23, S. 52), 「価値がある」(wert sein) (MEW 23, S. 63)。これらは同じ事柄の異なる表現である。
- 13) フッサールの「自我論的還元」(egologische Reduktion) も亦, 同じような意味で「方法的」な還元である。自我にとって「固有なものの領界」(Eigenheitssphäre), 自我にとって「第一次的なものの領界」(Primordialität) への還元の成果は, まさにこの固有領界の内部でこの固有領界を「越えでる」意

味が構成される事、窓を持たないはずのモノドがそれにもかかわらず他のモノドを構成しうる事が、かえって顕わになる事にある。拙稿「超越論的観念論とモノド論」弘前大学教育学部紀要 第49号, 1983, p. 23, 24 参照。

ルソーにおける「野生学的還元」(réduction sauvageologique) とでも称すべき還元もまた同様である。ルソーにおいて「自然状態」は、「もはや存在せず、おそらく決して存在しなかったし、たぶん今後も決して存在することはないであろう一つの状態」(Œuvres III, p. 123) として描かれている。それゆえ自然状態についての記述は、「歴史的な事実」ではなく「仮説的で条件的な推理」(Œuvres III, p. 135) にとどまらざるをえない。このような一切の「社会性」(sociabilité) の捨象、いわば「社会性の零度」への還元の結果に、「自己愛」(amour de soi-même) と並んで「あわれみ」(pitié) が「自然の感情」として見いだされるのである。この「自己の同類のものへの愛」こそが、一切の社会性の源泉なのである。J.-J. ROUSSEAU: DISCOURS SUR L'ORIGINE ET LES FONDMENTS DE L'INÉGALITÉ PARMI LES HOMMES; Œuvres Complètes, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard (以上 Œuvres と略記した) III, 1979. (翻訳は、『ルソー全集』第四巻 白水社刊と、岩波文庫版『人間不平等起源論』を参照した)。拙稿「野生学的還元と自然的社会性」(『レ・シトワラン』VOL. 3 弘前大学教育学部社会科学研究会 1986) 参照。

- 14) たとえば、商品交換は、「その純粋な姿では」(MEW 23, S. 173), 等価物どうしの交換である。剰余価値の源泉は剰余労働にある。しかしながら物事は現実には「純粋には行なわれない」(MEW 23, S. 174)。それゆえ、交換当事者には、この純粋な事態が隠され、あたかも交換関係そのものに剰余価値の源泉があるかの如く「現われる」のである。
- 15) 上記以外では例えば、「商品世界の諸価値において表われる社会の総労働力」(MEW 23, S. 53)。「商品の価値は、単なる人間労働を、人間労働一般の支出を表わしている」(MEW 23, S. 59)。「一商品の価値の大きさは、その商品に含まれている労働の量を表わしているだけである」(MEW 23, S. 60) 等々。
- 16) たとえば、「商品の交換関係ないし交換価値において表われる共通者は、その商品の価値である」(MEW 23, S. 53)。「亜麻布の価値を上衣において表わすときには亜麻布の上衣価値と言い、それを穀物において表わすときには亜麻布の穀物価値と言う」(MEW 23, S. 77) 等々。
- 17) 「同じ量の労働が、たとえば豊作の年には八ブッシェルの小麦において表われ、凶作の年にはわずか四ブッシェルの小麦において表われる」(MEW 23, S. 54)。「商品において表わされる労働」(MEW 23, S. 56)。「もし一着の上衣がX労働日を表わしているとすれば、二着の上衣は2X労働日を表わしている」(MEW 23, S. 60) 等々。
- 18) 等価形態の第二の特異性は、「具体的労働がその反対物、すなわち抽象的人間労働の現われの形態になる」(MEW 23, S. 73) という事にある。第三の特異性は、「私的労働がその反対物、すなわち、直接社会的形態にある労働になる」(ebenda) という事にある。
- 19) Edmund HUSSERL: LOGISCHE UNTERSUCHUNGEN, Zweiter Band, Zweiter Teil, Husserliana, Band 19-2, Martinus Nijhoff, The Hague, 1984.
- 20) あるいは、「代表する内容」、「代表者」(Repräsentant), 「統握される内容」(aufgefaßter Inhalt), 「統握の形式」(Auffassungsform) によって。
- 21) あるいは、「知覚的代表」(perzeptive Repräsentation) と「想像的代表」(imaginative Repräsentation) 等々に。
- 22) あるいは、「直感的代表者」(intuitiver Repräsentant) と。
- 23) “Abschattung” は「射映」と訳されるのが慣わしである。その意味は必ずしも明らかでない。「射影」とも言われるが、これはむしろ“Projektion”にふさわしい。“Abschattung”には、(i)abschatten すること, (ii)輪郭, シルエット, の二義がある。“abschatten”には、(i)abschattieren, (ii)暗くする, 影にする, (iii)(et<sup>4</sup>) (……)の輪郭(シルエット)を描く, の三義がある。“abschattieren”は, (et<sup>4</sup>) (……に)陰影(濃淡)をつけ[て際だたせ]る, を意味する。“Abschattierung”は, (i)abschattieren する事, (ii)陰影, 濃淡の差, ニュアンス, を意味する (GROSSES DEUTSCH-JAPANISCHES WÖRTERBUCH, Shogakukan, Tokyo, 1985)。“abschatten”は“abschattieren”を含むが, “abschattieren”は“abschatten”を含まない。abschattieren する事は“Abschattierung”によって固有の仕方では表現されている。しかも、フッサールには“Abschattierung”という表現は見られない。それゆえ、フッサールの“abschatten”には“abschattieren”の意味は含まれていないと見るべきである。“abschatten”は, 「シルエットをえがく」, “sich abschatten”は「シルエットとなって表われる」「輪郭だけを見せる」を意味する。「シルエット」とは、本来「輪郭内を黒く塗りつぶした横顔の画像」を意味する。「シルエット」は真に「瞬間的」かつ「一面的」である。光と影からなる多面体はその輪郭の変化にもかかわらず多くの点で同一性を保っている。シルエットにおいては当然の事ながら輪郭がすべてである。シルエットにおいては刻々の視点の変化が決定的である。
- 24) 「想像表象」(Imagination)におけるそれは、「想像的に代表する内容」(imaginativ repräsentierender

Inhalt), 「想像的に表わす内容」(imaginativ darstellender Inhalt), 「想像的にシルエットを描く内容」(imaginativ abschattender Inhalt), 「模写する内容」(abbildender Inhalt), 「類似する内容」(analogisierender Inhalt) である。

- 25) “Bedeutung” と “Sinn” の差異と同一性は、これまでも多くの人によって論じられて来た問題である。そのうえ、われわれには、それらに如何なる訳語を与えるかという難問がある。“Sinn” を「意味」とし、“Bedeutung” をそれとは別に「意義」等とする仕方がある。しかし、いずれにせよ、“bedeuten” に対しては無力である。それゆえここでは、“Bedeutung” と “Sinn” のいずれをも「意味」とし、必要に応じて、「意味<sup>B</sup>」と「意味<sup>S</sup>」によって区別を明らかにしようと思う。したがって、“bedeuten” は「意味<sup>B</sup>する」となる。
- 26) われわれが最終的に目指しているのも、この最も広い意味での「表わしと現われの普遍的相関」(universale Korrelation von Darstellung und Erscheinung) に基づく「表現の一般理論」(allgemeine Theorie des Ausdrucks) に他ならない。本稿はそのための「探索」(Untersuchungen) の一つとして意味を持つ。
- 27) G. W. LEIBNIZ: BRIEFWECHSEL ZWISCHEN LEIBNIZ, LANDGRAF ERNST VON HESSEN-RHEINFELS UND ANTOINE ARNAULD, 1686-1690, XXII, Leibniz au Arnauld, Septembre 1987; Die Philosophischen Schriften, Herausgegeben von C. J. Gerhardt (以下 G と略記する) II, Nachdruck der Ausgabe Berlin 1879, Georg Olms, Hildesheim, 1978.

上述に続いて、「表現」(expression) は、すべての「形態」(forme) に共通であって、「自然的知覚」(perception naturelle), 「動物的感情」(sentiment animal), 「知り認識」(connaissance intellectuelle) がその「種」(especes) を成すところの「類」(genre) として語られている。——翻訳に関しては、岩波文庫版『单子論』, 中央公論社刊『世界の名著』25, を参照した。訳語については、あえて慣わしを踏襲しなかったものもある。

- 28) G. W. LEIBNIZ; BRIEFWECHSEL ZWISCHEN LEIBNIZ UND DES BOSSES, 1706-1716, VIII, Leibniz an des Bosses, 11 Jul. 1706.
- 29) G. W. LEIBNIZ: Ohne Ueberschrift, enthaltend die sogenannte MONADOLOGIE.
- 30) G. W. LEIBNIZ: SYSTEM NOUVEAU DE LA NATURE ET DE LA COMMUNICATION DES SUBSTANCES, AUSSI BIEN QUE DE L'UNION QU'IL Y A ENTRE L'AME ET LE CORPS.
- 31) G. W. LEIBNIZ: MEDITATIONES DE COGITATIONE, VERITATE ET IDEIS; Ohne Ueberschrift, enthaltend DISCOURS DE METAPHYSIQUE.
- 32) “expression” と “representation” の差異に関しては、新ためて考察する事とする。
- 33) G. W. LEIBNIZ: SYSTEM NOUVEAU POUR EXPLIQUER LA NATURE DES SUBSTANCES ET LEUR COMMUNICATION ENTRE ELLES, AUSSI BIEN QUE L'UNION DE L'AME AVEC LE CORPS, Erster Entwurf.
- 34) ライプニッツに依拠するまでもなく, “vorstellen”, “repräsentieren”, “darstellen”, “ausdrücken” は、その日常の意味においても、非連続性をはらみつつ連続している。

“VORSTELLEN”. まず(i)「前に置く」である。次に(ii) “nachstellen” の反対。そして(iii)「～に紹介する」。これは、誰かを誰かの「前に置く」, 「眼の前に置く」, 「見えるようにする」の意である。俗に「お眼見え」と言うのがこれである。ついで(iv) “darstellen” と同義。「表わす」「表現する」, 「演ずる」「上演する」も、何か(誰か)を誰かの「前に置く」, 誰かに「見せる」意である点で変りない。さらに(v)「思い描かせる」, 「思い描く」。これは、心眼の「前に置く」の意である。

“REPRÄSENTIEREN”。「再び見せる」, 「代りに見せる」の意である。vertreten, darstellen, auf-führen との同義性も, 「堂々と振舞う」という転義も、これによって理解される。

“DARSTELLEN”。「そこに置く」, 「現に置く」である。そこから「現われさす」ないし「顕わにする」が派生する。これによって、まず, (i) 絵画, 彫刻などで「表わす」, 「描きだす」「表現する」。舞台で「～の役を演ずる」, 「～に扮する」。言葉で「描写する」, 「叙述する」(schildern)。と(ii)「～である」, 「～を意味する」, 表わす, 示す, 具現する。とを覆う事ができる。(iii) “sich darstellen als～”。これは, 「おのれを～として現われさす」, すなわち「～として現われる」, 「～であることが顕わになる」, 「～となる」の意である。

“AUSDRÜCKEN”。「外へ押し出す」である。内に隠れて「見えなかった」ものを外へ押し出し顕わに「見える」ようにする, 「表に現わす」「はっきり現わす」の意である。

「前に現わす」(vorstellner), 「再び現わす」(repräsentieren), 「そこに現わす」(darstellen), 「表に現わす」(ausdrücken)。これら「表わし」(現わし) の諸様態に、それぞれ, 「前に現われる」, 「再び現われる」, 「そこに現われる」, 「表に現われる」等の「現われ」(表われ) の諸様態が相関する(既出 GROSSES DEUTSCH-JAPANISCHES WÖRTERBUCH, Shogakukan, Tokyo, 1985. 参照)。

- 35) Edmund HUSSERL: IDEEN ZU EINER REINEN PHÄNOMENOLOGIE UND PHÄNOME-

NOLOGISCHEN PHILOSOPHIE, Erstes Buch, Neuherausgegeben von Karl Schuhmann, 1. Halbband, Martinus Nijhoff, Den Haag, 1976. — 翻訳は、『イデーニ I』(-1, -2) みすず書房刊 を参照した。

- 36) このように多彩な「Bild」が駆使されている事自体、この「対象自体」の理解が如何に困難であるかを物語っている。同時に、現象学的記述における「bildlicher Ausdruck」(HU 3, S. 190)の意義があらためて知られる。
- 37) 『イデーニ I』は、ここで、『論理学的研究』においては「意味<sup>s</sup>」(Sinn)の概念の中に「定立的諸契機」が「性質」という名で、初めから取り入れられていたと言っている。しかしながら、「Begriff des Sinnes (des “bedeutungsmäßigen Wesens”）」(HU 3, S. 305)と言い換えられているように、『論理学的研究』でも“Sinn”は“Materie”に等しいものと考えられていたのである。たとえば、「質料は、いわば、性質を基づける（だが性質の諸区別には関わりのない）対象的統握の意味<sup>s</sup>（またはつづめて統握意味<sup>s</sup>）である」(HU 19, S. 430)と言われている。「意味<sup>s</sup>の本質」の「理念化的抽象」(ideierende Abstraktion) (HU 19, S. 431)の成果である「意味<sup>s</sup>」(Bedeutung)について、それを端的に「質料」と規定し、しかる後に「性質づけられた意味<sup>s</sup>」と「性質づけられていない意味<sup>s</sup>」とに区別すべきか否か、「ながいこと動揺していた」(HU 19, S. 617)にすぎないのである。それゆえ、『イデーニ I』のこの「命題」は『論理学的研究』の「志向的本質」に相当する。後出の「充実された命題」は、「認識的本質」(erkenntnismäßiges Wesen) (HU 19, S. 626)に相当する。
- 38) これが「(最広義に解された) “意味<sup>s</sup>”」「(weitest verstandener) “Sinn”」(HU 3, S. 217)を成す。
- 39) 表現の本質的「一般性」のゆえに、「表現されているもの」の「特殊性」のすべてが「表現」(表現しているもの)のうちに「反映」される事は、「原理的に」ありえないのである。「下部の層における可変性の全次元」(HU 3, S. 291)、たとえば、「相対的な明瞭性と判然性の諸変様」、「注意の諸変様」等は、そもそも「表現している意味<sup>s</sup>作用」(ausdrückendes Bedeuten)のうちには、全く入り込んで来ないものである。それらなしそれらの相関者が「おのれを表現する」(sich ausdrücken) (ebenda) 事はそもそもありえない事なのである。しかしながら、明瞭性や判然性の差異や注意の諸変様が、たしかに「概念」ないし「思考」の「一般性」の枠内においてではあるが、たとえば、「くっきりと」、「ありありと」、「掌を指す如く」とか、「眼を皿のようにして」、「食い入るように」、「我を忘れて」、「何気なしに」等々の表現によって記述される事は可能であるはずである。